

新潟大学の魅力と現在を発信

新潟大学季刊広報誌

花



NIIGATA UNIVERSITY
MAGAZINE

— R I K K A —

2016.WINTER [No.15]

 新潟大学

授業紹介 -教育の現場-

学生の課外活動&サークル紹介

Enjoy! 学生ライフ

シリーズ「恩師と語らう」

注目される研究報告

Campus Information

特集 学長インタビュー

—大きく変化する
国立大学を取り巻く環境—
就任3年目にかける今後の大学運営

今号の表紙は、就任3年目を迎えた高橋姿学長。昭和51年に本学医学部医学科を卒業、その後、同学部の教授として活躍。専門は耳鼻咽喉科・頭頸部外科学。撮影は前日の悪天候が嘘のような好天の下、五十嵐キャンパス正門広場にて。



CONTENTS

03 特集 学長インタビュー 「大きく変化する 国立大学を 取り巻く環境」

08 授業紹介 - 教育の現場 -

09 Enjoy! 学生ライフ

10 シリーズ「恩師と語らう」

11 注目される研究報告

12 Campus Information

『六花』とは…

本誌のタイトルでもある『六花』とは、本学の校章のモチーフである“雪の結晶”を表す言葉。本学の校章は、シンボルマークであった学生章をモチーフに本学名誉教授 小磯 稔氏がデザイン化したものです。



題字
野中浩俊(のなか ひろとし)氏
新潟大学名誉教授(教育人間科学部)。専門は、書道、富岡鉄斎研究。
現在は、岐阜女子大学 教授

公式Facebookページ更新中!



本学ホームページからアクセスしてください。

ホームページで発信するニュースのほか、四季折々のキャンパス内の風景など新潟大学をもっと身近に感じていただけるコンテンツを発信しています。多くの皆さまの「いいね!」をよろしくお願いいたします。

特集

「大きく変化する 国立大学を取り巻く環境」

国立大学を取り巻く環境が変化し、大学改革の必要性がさげばれる中で就任した高橋姿学長。第3期中期目標・中期計画期間に向けて、改革を加速する中、精力的に大学運営をリードしてきた。今号では、2014年2月の学長就任から2年が経過し、任期半ばを過ぎた学長にインタビュー。学長就任3年目にかかる今後の大学運営の展望をお伝えします。

Contents. 1

学長インタビュー 就任3年目にかかる今後の大学運営

Contents. 2

機能強化基本戦略Pick Up

● 高橋姿 学長インタビュー ● — 就任3年目にかける今後の大学運営 —

2014年2月の学長就任から2年が経過し、任期半ばを過ぎた高橋姿 学長に、これまでのご苦勞や、将来展望などについて話を聞きました。(聞き手:広報室長 小奈 裕)

第3期中期目標と 中期計画期間に向けて 改革を加速する時期に

近年、国立大学を取り巻く環境が変化し、大学改革の必要性がさげられ、本学もさまざまな取り組みを実践しています。大学改革を使命として取り組まれる学長は、就任からの2年間で振り返り、どんな感想をお持ちですか？

率直に言って、怒涛のような2年間でした。特に1年目は諸行事への出席や、各部への事務的・教育的・研究的な事項の説明などに費やす時間が多かったように思います。それがあつたから今年度は大学の進むべきビジョンや方向性を具体的に考えることができました。文科省や関連事業へアプローチした結果、予算獲得できるようなったのも好例だと考えています。その一方で、第二次中期計画の最終年ということの難しさは同時にありましたね。来年度へ向けての加速期間であり、緊張感をもって臨んだ2年間だったと思います。

17部局を回り獲得した 現場との密な コミュニケーション

特に、学内17の部局を回り、予算の説明やヒアリングを行ったことでよい流れが作られたのではないのでしょうか。現場とのコミュニケーションが生まれ、多様な意見を集められたように思います。

そうですね。28年度からの第3期に向けた大きな将来ビジョンを考える上で、各部局や教員から意見を直

接いただけたのはよい経験だったと思います。素案を提示しながら自分の考えを述べていく中で、やるべきことが徐々に固まってくるのも肌で感じることでできたと思います。

国立大学協会の 副会長に就任し 広がった大学運営の視野

学長は昨年6月に国立大学協会の副会長に就任されました。当該業務も増えましたが、会長（東北大学長）、副会長（京都大学長、筑波大学長、豊橋技術科学大学長）とのコミュニケーションや政財界へのアプローチによって、大学運営の視野が広がったのではないのでしょうか？

旧帝国大学系のメンバーが多い執行部にあつて、私だけがいわゆる地方の総合大学というポジションです。これは独自の立場と考え方を持つことができた。国立大学協会のアキシヨンプランに参画することで、今後の国立大学が進む方向については当然詳しくなります。協会全体の利益になる活動をした結果、私自身の立ち位置や考え方が定まり、新潟大学そのものによい影響が出れば良いと思っています。

人脈が広がったことの好影響はありましたか？

もちろんです。県内の国会議員とは全員顔見知りですし、文科省関係の議員とも知り合いになりました。財界では東京の経済同友会の教育改革委員会に参加する機会があり、地方大学のインターシッパの現状や問題点をお話することができました。インターシッパに協力してくれる総合大学である強みをいかして、多様な興味と感心に即した選択が可能で、まさにオンラインワン自分を作っていくことが可能です。文科省には大変興味を示してもらい貴重な意見をいただきましたし、マスコミや財界の方々にも非常に好印象でした。裏返せば、学問主導型教育の物足りなさや各方面の方々が感じ、新たな教育プログラムを期待している表れもありません。「創生学部」の考え方は、従前の主専攻プログラムにもよい影響が出ると期待しています。



ダブルホームは学部・学科を横断して幅広く学生と教職員が繋がりをもち場を設ける、新潟大学ならではの取組み

学生時代の挑戦は 大きな財産になり 卒後の人生で役に立つ

最後に本学出身の学長から、後輩学生に向けてメッセージをお願いします。

学生には自分の可能性を信じて、諦めない気持ちを持つしてほしい。「自分は必ず成長できる」と常に思いながら大学生活を過ごしてほしい、そのためにいろいろなトライアルをしてほしいと思います。留学をすること



識した上で出費を考えていかなければいけません。27年度も教育研究費は非常に厳しい状況でした。限られた予算に対し先生方がそれぞれ無駄を省く努力をしておられるのだからというのが実感です。やはり外部資金の獲得に向けて積極的に取組んでいくことになるだろうと思います。

地方にありながら 世界を見据えた 大学を目指す

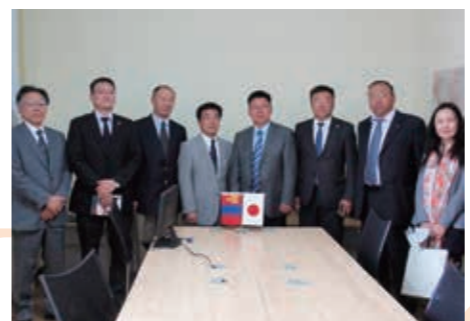
まずもって第3期が始まります。本学の進むべき道はどんなものになるのでしょうか？

業数はあるが、多様性にはどうしても欠ける。地元企業に就職するにしても、都内の企業でインターシッパ経験を積むことは非常に意味があることなのではないかという内容でしたが、日本のトップ企業の方々からも賛同をいただきました。その結果、28年度からは数社から理解をいただき都内の企業とのインターシッパ提携が試験的に始まります。29年度からは単位化も考えていますが、これは単なる就業体験ではありません。学生に卒後の将来を考える上で刺激を与える意味があると思っています。

学長のリーダーシップが 新しい大学の組織と 方向性を導く

大学の経営面では、資源を投下するべきところには投下し、節約できるところは節約することが必要だと思えますが、いかがでしょうか？

経営力の強化は最重要事項のひとつです。大学改革が絵に描いた餅にならないようにしなければなりません。おっしゃる通り、使うものに関しては効率を考えてやる。機能強化を意



モンゴルの首都・ウランバートルに、学術交流拠点として事務所を開所。研究や学生交流で一層の連携を目指す

もよいでしょう。海外生活はインパクトだけでなく、その後の人生の大きな自信に繋がっていくはず。大学時代の経験はその後の人生のベーンになり、大きな財産です。すぐに答えが出ないものにチャレンジしたりトライする気持ちを育てることは必要だし、たとえ思い通りの結果が出

なくても、卒後の社会人人生で必ず役に立つと思います。インタビューに答える高橋学長の姿勢には、新潟大学の存在価値を明確にし、強み・特色を生かして国民の期待に応えたい意気込みがはっきりと感じられました。



朱鷺・自然再生学術センターでは、トキとの共生をシンボルとした自然再生を実践できる地域社会システムの構築を目指す

最近、注目が集まっているのはミャンマーの感染症研究拠点の取組みでしょう。農学部とトルコの間でも研究拠点の推進が行なわれています。このようなアジア地域全般に渡る展開を具体化する一方で、地元新潟の充実に努めなければなりません。佐渡をモデルとした新しい持続可能な社会形成に対する貢献はその最たる例です。



新潟大学脳研究所は、国内外研究者との共同研究の核となる、わが国で最初の脳に関する国立大学附属研究所

本学は以前から人材養成を重要戦略に掲げてきました。現在の社会状況下では、さらなる期待が寄せられていると思います。

学部と大学院の組織改革を進めることは、新しい時代の要請に応えられる人材輩出を促すはず。あとはインターシッパですね。これは結果的には地域貢献・連動に繋がっていくのではありませんか？

29年には新しい教育プログラム「創生学部」の設立が構想されています。これはどういう特徴があるのでしょうか？

「創生学部」は改革の肝だと思っていて、学生が自ら何をやりたいのかを決めて自分でプランニングしていくというものです。つまり学習の目的を自分で作り出していくというものを



理事の顔ぶれ

理事(企画・評価担当)／副学長
濱口 哲 はまぐち きたし

理事(教育担当)／副学長
大浦 容子 おおaura ようこ

理事(研究・社会連携担当)／副学長
高橋 均 たかはし ひとし

理事(病院担当)／副学長
鈴木 榮一 すずき えいいち

理事(総務・労務・財務担当)
高比良 幸蔵 たかひら こうぞう

平成28年2月1日現在

学生にとっては、部活に代表される課外活動も大切な青春の1ページですよ! このコーナーでは、そんな部活動を中心とした新大生の活躍をお届けします!!

CIRCLE PICK UP! 運動系

体と心を鍛える武道
剣道部



社会でも役立つ剣道。段位取得を目指す部員も

↑現在部員は50名以上。互いに切磋琢磨し、練習に取り組む

高いレベルの練習に励み
今年も全国大会へ

「普段の部活動は週5回、体育館で行い、やる時はやる、やらない時はやらない、メリハリをつけて日々の練習に取り組んでいます。練習中は全員が決まった練習をするのではなく、技練習の中でも自分が練習したい技を重点的に練習するなど、個々のレベルに合わせた練習がメインです。昨年は男女ともに全国大会に出場できたので、まず今年は北信越大会を勝ち抜き、全国大会で勝ち上がっていくよう、練習に励んでいきたいです」



部長 長谷川祥吾さん(教育学部3年)

CIRCLE PICK UP! 文化系

発想力と表現力を養う
演劇部



決められたテーマをわずか10秒で表現発想力が問われます

↑このポーズのテーマは「お花見」。部員同士のチームワークも演劇の見どころ

演劇を通して
多くの体験をしよう

「演劇部では週に3回、夏と秋にある公演の前になると週5回活動しています。普段は声出しや、体の動きだけでひとつのテーマを表現するグループ練習などを行い、発想力や表現力を磨いています。また演劇部では役を演じるだけでなく、演出家から監督、舞台照明家、公演会の広報まで、全て部員が担っているんです。演技と舞台の裏側を作る両方の楽しさを体験できるのは、この部活の大きな魅力だと感じています」



部長 丸山哲平さん(工学部1年)

意欲ある学生が伸び伸びと勉学に勤しむ

授業紹介 — 教育の現場 —

第14回 教育学部

土佐幸子 教授

Profile
専門は理科教育学。理科分野における国際比較を研究している



理科教育法

積極的な学びのコミュニティを通し
理科分野における教育現場の発展を目指す

現在の日本の大学教育で行われている指導者からの一方通行の授業スタイルではなく、ディスカッションや実験などを積極的に取り入れ、理解を深める探究的指導法を学ぶ授業。教壇に立つのは理科教育分野を国際的に比較する研究を専門にする土佐教授だ。「世界の理科教育の分野では、学習者同士の意見交換を行う能動的な学習法のアクティブラーニングが広がっています。知識は、指導者が一方的に情報を提供するのではなく、子どもたち自身が「そういうことなんだ!」と理解することで初めて身につく

です。参加型の授業構成の理論や指導方法を体験的に学び、子どもの目線に立った教員になることを目標にしています」と語る。講義だけではなく学生を対象にした模擬授業も実施。数人のグループに分かれ、各テーマごとに一定時間の授業を行う。学生同士でそれぞれの授業を受け、評価し合うことで今後の課題を自覚し実践力を養うことができる。「自分の考えを言葉にして発信する力は、教員に限らず、企業で働く人から主婦として生活する人まで様々な日常のシーンに生きてくると考えています」。

専門的な知識や技術の修得と、均整の取れた知識の獲得は教育の重要な役割。約5,000科目の中から特色ある授業を紹介。



STUDENTS VOICE

「ただ話を聞くだけではなく疑問点に対する自分なりの意見を発信する場面が多々あります。何かをしながら考えるということが習慣づきます」(鈴木)「子どもの理解をどう引き出すかを学んでいます。3年生になると教育実習があるので、模擬授業は練習として自分を試せる貴重な時間です」(横山)



右 鈴木竜生さん(教育学部2年) 左 横山千晶さん(教育学部3年)

CAMPUS TOPICS!

学生と学長が大学での学びや学生生活を語り合う—新大キャンパスミーティングを開催—

本学の教育理念「自律と創生」を学生と教職員が共同して実現していくことを目的とした「新大キャンパスミーティング」が12月14日、中央図書館にて開催され、約50人の学生と高橋学長をはじめとする教職員が、車座になってじっくり語り合える座談会形式で大学での学びや生活について語り

合いました。各テーブル学生と教職員の5人程度のメンバーで構成し、学生たちが授業や課外活動などに対する要望や悩みを発言すると、教職員は学生の意見に耳を傾け、メンバー全員で改善策を考えるなど、今後の大学教育やキャンパス環境について考える貴重な機会となりました。



女性研究者の活躍と学生のキャリア形成支援を支える—新大シッター認定証授与式を挙—

研究者が、土日祝日のやむを得ない業務の際に、認定を受けた学生が子どもの保育を行う全国でもユニークな制度「新大シッター」。9年目を迎える平成28年1月18日、様々な研修を終えた学生25人が、晴れて新大シッターとして高橋学長から認定証が授与されました。この制度は、女性研究者の研究と家庭との両立をサポートする保育支援はもちろん、新大シッター学生が研究者のロールモデルからキャリア意識を形成し、男女共同参画に向けた意識を醸成するなど学生のキャリア形成支援としても大変有益なものです。



森下修次 准教授

Profile
専門は音楽科教育。音楽音響や楽器、また障害者関連のそれらにおいて連携・開発を研究。



小学校音楽

ポピュラー音楽やバロック音楽を題材に
音楽の構造を理解、即興演奏の習得を目指す

小学校で音楽を教えるために必要な基礎的な知識と技能を習得する時間。クラシックの基礎はもとより、学校現場で扱うことが多いポピュラー音楽の構造を理解し、指導に活かすことが目的だ。座学による音楽理論の理解に加え、ピアノを用いた実技で、伴奏編曲の習得も目指す。「仕組みや成り立ちを理解しなければ音楽の本当の面白さは分かりません。教員が音楽の構造に注目しなければ、子どもに興味を持たせることはできない。これが学校現場で創作と鑑賞がうまくいっていない原因のひとつだと考えます。西洋音楽はメロディだけで

なく、伴奏や和音を聴いて初めて、曲が言わんとする意味が分かるもの。仕組みが分かれば聴かせ所が分かるようになります」と准教授。それらの知識と技術を身に付けた教師が伴奏を弾けば、子どもが普段聴いていない所に気付かせることが可能だと続ける。「音楽は本質的に自分で作っていくものですから、構造を理解していれば楽譜を使わず自分で創って弾いてもかまいません。聴かせ所を指導してあげれば、子どもも音楽をより深く学ぶことができる。音楽を楽しむために必要な“聴く耳”を育てる方法を学ぶことが目的です」。

STUDENTS VOICE

「音楽を教える際に必要なポイントを学んでいます。即興演奏は、ルールを守りつつ自分なりに作っていく面白さがあります」(高沢)「座学と実技がセットになっていて、音楽の構造を実際に音と結び付けて身に付けられます。先生はポップスも題材にし、分かりやすく説明してくれます」(真島)



右 高沢諒介さん(教育学部2年) 左 真島杏奈さん(教育学部2年)

研究課題 リボソームが保有する触手様タンパク質の多様なはたらき

自然科学系(理学部生物学科) 内海利男 教授

タンパク質を合成する細胞内物質
リボソームの触手のはたらきを解明

成長、活動、病気、老化等の生命現象を直接演出しているタンパク質、その数はヒトで2万種類と言われるが、約半分のはたらきは解明されていない。「タンパク質は20種類のアミノ酸が繋がっていて、その並び方で形が決まります。それがどうやって作られるのかを探るのが私たちの研究です」と内海教授。遺伝情報に従いアミノ酸を繋ぎタンパク質を合成するリボソームという粒子状の細胞内物質が、効率よく因子を引き寄せる触手の様な仕組みを持つと推定し、結晶構造解析やNMR解析を行い世界で初めてその実態を解明した。「リボソームはタンパク質の材料を触手でつかみ、本体に運ぶことでタンパク質を合成します。しかし、この触手は有害な毒素も捕獲してしまいます。生命活動に必要な因子と有害な毒素を取り込む仕組みが一致しているのがおもしろい。毒素も生命を効率よく殺

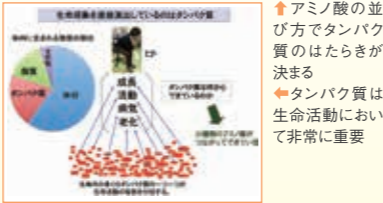
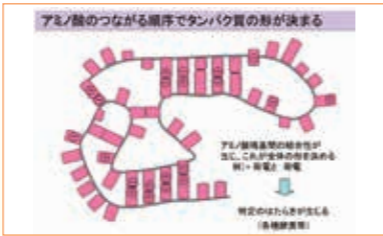
すために進化してきたのかもしれない。生物界の興味深い現象です」。さらに研究が進み細胞・遺伝子工学の技術を利用して、触手が因子を捕まえる速度をコントロールできる可能性もある。「例えば大腸菌等のバクテリアのタンパク質を作る速度を調節することで、役立つタンパク質を自在に作らせることができるかもしれません。将来的にさまざまな分野の発展につながる研究だと認識しています」。



↑内海教授らが解明したリボソームの触手の図解



内海利男教授
医学博士。専門は機能生化学、分子生物学。



↑研究を進める内海・伊東研究室のメンバー

新潟大学の特色ある
研究トピックを紹介

注目 される研究報告

研究課題 シベリア少数民族言語の文法研究

人文社会・教育科学系(人文学部)
江畑冬生 准教授



江畑冬生 准教授
博士(文学)。フィールドワークを行いロシアの少数民族言語(サハ語・トゥバ語)の文法を研究。

シベリアの少数民族言語の文法特徴を明らかにする。シベリアの少数民族言語の1つであるサハ語を研究。この言語が持つ独自の緻密な構造は、祖先の言語の状態を知るための手掛りを持ち合わせていると考える。「直接現地へ行き、文法調査を行っています。仮説に基づいた質問を繰り返すことにより、話し手が無意識に操る言語の中に潜む文法規則を見付け出そうとします。こうした地道な調査を続けることにより、サハ語には世界の諸言語の中でも珍しい現象があることも明らかにできま

した」。2014年からは、朝



↑文法調査で訪れた現地にて。話し手の数が少ない言語や小さな方言もそれぞれ独自の「仕組み」を有することを明らかにする

新潟大学では、伝統的な学問分野を継承するとともに、専門分野を超えて連携し合う研究や、先端的な研究など、真理探究や社会の発展に貢献する研究を行っています。

北東ユーラシア地域の
諸言語を比べて言語が内包する
文法特徴を明らかにする

シベリアの別の少数民族言語で、サハ語と親戚言語の関係にあるトゥバ語の調査も開始。「両者の文法構造には、一見したところでは捉えにくい違いが存在することが分かってきました。目下、両言語間の文法的な違いには一貫した傾向が見られることを見出しつつあります」。当然のことながら、サハ語とトゥバ語の間には多くの共通点もあります。その1つに派生形態の豊かさがあると指摘。この特徴は、近隣のモンゴル諸語やツングース諸語にも見られると言葉を続け「実は同じ特徴は、朝

鮮語や日本語も持っています。つまり大きな目で見れば、北東ユーラシア地域に分布する諸言語には形態法に関する特徴を共有していると言えます。ある言語の特徴を明らかにしたいときに、別の言語と対照することで特徴が見えやすくなる場合があります。今後私はサハ語・トゥバ語の現地調査を重ねながら、北東ユーラシア地域の諸言語を比べて見ることから言語が内包する文法特徴を明らかにしたいと考えています」。

シリーズ
「恩師と語らう」
恩師: 渡邊 英伸 名誉教授
元・新潟大学医学部教授
教え子: 岩淵三哉 教授 味岡詠生 教授
撮影場所 / 新潟大学医学部



渡邊 英伸 名誉教授
医学博士。専門は消化器病理。1979年、九州大学から新潟大学に転任。消化器疾患を病理学と臨床的側面から分析する。2004年に退官し、現在は株式会社ピーシーエルジャパン病理・細胞診断センター特別顧問。

渡邊 岩淵教授は僕の研究室の第10期生、味岡教授は病理総論を最初に受けてくれた世代。ふたりともすごく印象深いですね。
味岡 当時から先生は人材育成に熱心で、「やるのがなくとも夜の12時まで帰るな」とおっしゃっていましたね。
岩淵 僕は11時までと言われて



岩淵三哉 教授
1980年、新潟大学医学部卒業。現在は、本学大学院保健学研究所検査技術科学分野教授。

岩淵 僕が大事にしているのは「標本は問いかけなければ何も答えてくれない」という先生の言葉。座学で身に付けた知識だけではなく、患者さんの標本にある実際の所見を肉眼と顕微鏡でよくみて、そこから考

えていく姿勢というのは、現在に至るまで本当に役に立っています。実はこの言葉、今は私が学生や若い人の指導で使わせていただいているんですよ。

味岡 そういう人間性に関わることをたくさん教わりましたね。特に「自力本願では限界があるから、他力本願で自分を縛ることも必要」という考え方は、人は自分の意志だけですべてをやるほど強くないわけですね。先輩や上司に言われたことは受け入れて、まずはやってみる。それも自らを律するに

は大いに役立つんですね。
岩淵 僕が大事にしているのは「標本は問いかけなければ何も答えてくれない」という先生の言葉。座学で身に付けた知識だけではなく、患者さんの標本にある実際の所見を肉眼と顕微鏡でよくみて、そこから考



味岡詠生 教授
1984年、新潟大学医学部卒業。本学大学院歯学総合研究科分子・診断病理学分野教授。

岩淵 僕は当時、仕事が遅いと叱られました。それは今でも変わっていきなくて心苦しいんですが(苦笑)。
渡邊 岩淵君は用心深いんだ(笑)。僕が言ったのはね、自分が持っているものを出していかないと、徐々に自分の生きる道が狭まるんです。若い時はいい。でも年をとると若い人がどんどん自分を追い越していくわけ。その時こそ自分を主張しないといけないと思うんです。
味岡 そういう人間性に関わることをたくさん教わりましたね。特に「自力本願では限界があるから、他力本願で自分を縛ることも必要」という考え方は、人は自分の意志だけですべてをやるほど強くないわけですね。先輩や上司に言われたことは受け入れて、まずはやってみる。それも自らを律するに

岩淵 僕が大事にしているのは「標本は問いかけなければ何も答えてくれない」という先生の言葉。座学で身に付けた知識だけではなく、患者さんの標本にある実際の所見を肉眼と顕微鏡でよくみて、そこから考

えていく姿勢というのは、現在に至るまで本当に役に立っています。実はこの言葉、今は私が学生や若い人の指導で使わせていただいているんですよ。

渡邊 学問を含め人生ってそういうことだと思っ。まずは従来の考え方や説を学び模倣する。そして検証・再考し、これが発見やクリエイションになっていく。この三角形をぐるぐる回して積み重ねていくことが大切。最終的にはクリエイションがなければいけない。今は、コンピュータで調べれば知識なんていくらでも出てくる時代でしょう。だからこそ真偽を見極める力は必要であり、そして人を育てるためには長いスパンで考えなければいけないよね。ふたりはもうクリエイションの時期だし、人材を育成する立場ですから。最近の岩淵君は僕なんかより真実があるよ(笑)。
岩淵 大先生に言われると恐縮してしまいます(笑)。
渡邊 今後その経験をどんどん生かしてほしいですね。短期で考えるより、ある程度じっくりと、中期で物事を考えてほしいと思いますね。

Campus Information

地域に密着しながら様々な活動が続ける新潟大学。皆さんにお伝えしたいニュースはたくさんあります!

新潟大学サポーター倶楽部を設立しました

2009年に「新潟大学基金」を創設し、卒業生や地域の皆さまからのご支援をいただき、より高い教育・研究成果、社会への大きな貢献など、ご期待に応えてまいりました。

このたび、地域の中核を担い、国際社会で活躍する人材の育成のため、学生の修学、国際交流などへの支援をさらに強化することを目的として、地域を支える企業・団体をはじめとする多くの方々から継続的にご支援をいただける仕組みである「新潟大学サポーター倶楽部」を3月4日に設立しました。

同日には、同倶楽部の設立幹事会が開催され、ご参集いただいた幹事企業11社から今後の運営について意見交換・提案がありました。今後は会員を拡充し、「輝け未来!!新

潟大学入学応援奨学金」などの本学独自の奨学金や、海外へ留学する学生への支援などを進めていく予定です。

同倶楽部からの継続的なサポートは、本学が実施する取組みの充実につながるだけでなく、会員企業と本学との積極的な情報交換などによって、産学連携事業や共同研究の増進につながることも期待されています。

ご興味のある企業様は、下記担当まで気軽にお問い合わせください。

【担当】新潟大学サポーター連携推進室
Tel:025-262-5651
E-mail:kikinjimu@adm.niigata-u.ac.jp



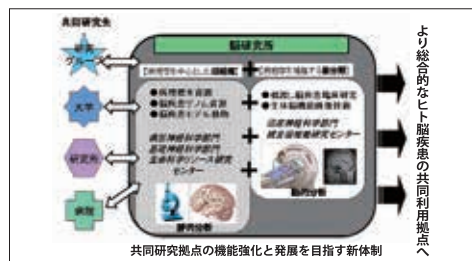
脳研究所が共同利用・共同研究拠点として認定更新されました

脳研究所は平成22年4月より、文部科学省の共同利用・共同研究拠点「脳神経病理標本資源活用の先端的共同研究拠点」として認定され、膨大な脳神経疾患に関わる資源と、それに関わる専門的な知識・技術をわが国の脳科学研究者コミュニティに公開し、脳神経病理学とその関連分野において多様な共同研究を創出し、数多くの実績を挙げてきました。

この度、脳研究所の活動が文部科学省の評価を受け、平成28年4月1日から共同研究領域の広がりや踏まえ

て、「脳神経病理資源活用の疾患病態共同研究拠点」に拠点の名称を変更し、共同利用・共同研究拠点として認定更新されました。

今後は、蓄積してきた世界有数規模の脳神経病理標本資源と最先端の脳機能画像解析技術を基に、アルツハイマー病等の脳神経疾患に関する脳病理・病態解析、早期診断技術開発、進行抑制治療に向けた橋渡し等の課題を先進的に研究し、その成果を発信するわが国唯一の共同利用・共同研究拠点として世界をリードします。



新潟大学基金のお知らせ ぜひご協力ください

学生の修学支援、国際交流活動等に活用しています。

※税法上の優遇が受けられます

●基金ホームページ

<http://www.niigata-u.ac.jp/kikin/index.html>

●新大サポーター連携推進室

電話:025-262-5651 (受付時間 平日9:00~17:00)

FAX:025-262-7796

E-mail:kikinjimu@adm.niigata-u.ac.jp



「新潟大学カード」入会受付中!

VISA付きの国際カード「新潟大学カード」。

卒業生と母校の絆を、いつもポケットに!

●新潟大学カードに関するお問い合わせ先

新潟大学全学同窓会事務局

電話:025-262-7891

(受付時間 平日10:00~15:00)

E-mail:dosojimu@adm.niigata-u.ac.jp



新潟大学 季刊広報誌 **六花** RIKKA (No.15) 2016.Winter

●発行/平成28年3月 ●編集/新潟大学広報センター (新潟市西区五十嵐2の町8050番地)

●電話/025-262-7000 ●FAX/025-262-6539

Home Page <http://www.niigata-u.ac.jp/>

E-mail rikka@adm.niigata-u.ac.jp

Facebook <https://www.facebook.com/niigata.univ>

編集後記

新潟県外の方からすると新潟の冬は雪深く、一面の銀世界を想像されるかと思いますが、温暖化のせいか年々降雪量は減り、キャンパスが雪化粧に覆われるのは年に数回となりました。今回の特集は、学長インタビュー。就任3年目にかけて今後の大学運営を熱く語っていただきました。ご覧ください。(K.I)

定期送付のお知らせ 季刊誌「六花」は卒業生の皆様に無料で定期送付させていただきます。ご希望の方は、広報センターまでご連絡ください。

リサイクル適性
この印刷物は、印刷用の紙をリサイクルできます。